

報



會

會 岳 山 本 日

76

月 五 年 三 十 和 昭

小樽の春

坂江善治

根雪の無くなる頃は、又初冬にその出来るときに街は終日雪融けで水浸しである。バスの通る路はその轍が深まつて難澁するので雪割が出勤して地表に層をなした堅雪を掘つた。四月に這入つてからは何かを契機として雪降りは今もなくなくなり、雲の低い日には決つて山で云霧小便があつた。街は斯うして冬の残された貌を總ての方向から追ひやつて、舗装のある銀座街は一早く南風に砂塵を捲きあげた。

花曇ならぬ練雲と土地では云う天候がある頃練があがるのである。初練の賣聲が高く街を走るのを聞く、自分達までが生々とした氣持になり、自然それの漁況などが話題になり、新聞も練景氣を書きたてる。此の土地へ来て迎へた初めての練季節には、小骨の多い柔軟な而も大味なそれには見向きもしなかつたが、二年目三年目と次第に親しみを加へて来るのはお可らしい位である。

其の後に春の好晴がやつて来る。石狩の入海の向うに残雪をべつとりと纏つた暑寒別山群が案外手近に見え、冬中は全くその在處さへ知れなかつた山の一葉々々が浮出して見られたりした。春の山といへば、積丹半島の核心をなす積丹岳、余別岳の千五百米級も初夏の頃まで残雪豊かに随分立派である。羊蹄山の縞模様

も近郊の遠藤山邊まで出掛ければ愉しんで來られる。

落葉松の秋の金色も悪くはないが、芽生へ時の林は全く萌え出ると云う文字通りの煌きを見せる。林檎に似た純白な西洋實櫻の花も開く、雪ころを上げる山女魚を追つて、實櫻の一杯咲いた畑を灌漑する流れを遡る味は珍しいものであらう。紺青の海が林檎畑の向うにちらつき、行手には雪の縞も豊富な七百米級の、此の冬は幾度となくスキ一の舞臺になつた山々を、案外立派だと思ひ乍ら山女魚はそつちのけで見入つて了つたりする。

熊本の岳兄Kさんからの來信で、鯉の標本を造るから早速釣上げて送つてくれとのこと、前年の夏に十勝の然別沼に遊び、あの邊の鯉の豊富さを書いておいたので、春になつてから早速の御注文である。沼の山田温泉には越冬してゐる親爺はあるにしても、十勝平原の奥に春雪深く静まり返つてゐる其處へは郵便も如何かと思はれたので、自身で奥手稻山の裏側、小樽内川へ釣上げに出掛けだ。錢函で汽車を降り、この冬は幾度も通つた錢函峠への道を短スキ一を擔いで登り始めた。石狩の平原には雪の消え残りもないが、峠から春香山にかけては未だ淺からぬ雪である。歸途の滑降を愉しみに酷く歩き辛いらぬ雪を踏んで行つた。去秋はこの峠を越して鯉を狙つたのだが、仲間では友人釣師のTが一匹を

釣上げたのみで、歸途には山葡萄をしこたまびくに詰めて歸つたものである。雪しろの頃だつたら厭になる程かゝると云うTの言を鵜呑にしてやつて來たのではあるが、滑れ共く春雪は厚く流れに被さつてゐて針を下す譯にゆかない。やつこのとで水流を見つけてどぐい、蟲をつけた針を投げた。斯うして口の開いてゐる處をめぐっては釣下つたものゝ獲物皆無で、今度は夕方の空氣を截つて素的な滑降を錢函驛へ續けたのであつた。斯くして「鯉釣りは短スキ一に乗つて」のタイトルは、短スキ一だけの效果に終つて、其後は再び繰出す元氣もなく鯉の件もその儘になつて了つた。

五月の新緑と共に郭公、鶯、山鳩等が住居近く來て啼く様になる。もつとも僕の住居は二百米程の山の裾に在るせいでもあるが、起き抜けに緑の明い波と共にやつて來る郭公の二聲三聲は寧ろ勿體ない氣がする。庭の落葉松に鴉が巢をかけたなども珍しい經驗であつた。鯉の獲れ始めた四月上旬、丸裸の樹梢に數本の枯枝が引懸つてゐるなと思つてゐるうち、日毎に恰好がついてゆくので始めてそれと知つた。隣に在る實櫻や落葉松自身も冬芽は次第に膨らみ、そのうちに巢の大部分を掩蔽して了つた。其後卵を抱いたのだらう、いつも巢の中に鴉夫人の氣配がして、二階から覗くと決つて啼聲をあげては飛出した。五月の或日の午

後、この日も海は凄く紺色で増毛の雪山は一段と綺麗だつた。もう鴉のこつこ(仔)も出る頃だらうと二階の屋根から巢に近づき一瞥に及ぼうとした、途端、巢を離れた夫人は程近い白樺に止つて啼き出すと見るや裏山方面から馳せつけた他の一羽があつた。此處に頭上を旋回して眞剣な脅喝が始まつたのである。それ以來鴉への興味よりも憎悪が先立つたが、程なくストーブ藏ひの偽の煙突

昭和十三年版『山日記』発行

來る六月中旬、十三年度版山日記が発行の運びとなります。例年の通り會員に對し特別定價を以て御願ひすることになりました。豫約申込を募ります。

- 1、頒價一圓(定價一圓二〇錢)
- 2、送料本會負擔
- 3、申込期限六月末日

屋が來て幾人もかゝつて面白半分に巢を突き落して了つた。黒い翅が僅に生えたほの赤いこつこが四匹、落葉松の根本に冷くなつてゐるのを見た時には僕も少し氣の毒に思つた。六月になる。街を圍む五六百メートルにも雪の斑消とてもなく全くの緑の世界である。植物の鮮い小樽の街とはいへ、落葉松とポプラ、楓の類西洋實櫻と日を次いで貌を備へ實を膨らませてゆくのは愉しみ極まりないものである。

かまぼこ型冬季天幕の一試作

福田嘉四郎

かまぼこ型冬季天幕のことを少しばかり書いてみませう。

勿論試作のことですから各部分に亘つて缺點もあるでせうし、亦大いに改良を加へねばならぬ點もあることと思ひます。實は僕自身としてもまだ完全なものと思つてもゐませんし、また自信がありません。そんな状態ですからこんな紙上で發表するのはどうかと思ひましたが、現在はこの山岳部でもドウム型に注意が集中されてゐるやうですので、一つ位はこんな發表があつても差支へないのではあるまいかと思ひます。それに若し、今後この型の天幕を作る方の参考ともならばとも思つたので不完全ながら書いてみることに致しました。

このかまぼこ型天幕は、山岳講座や好日山莊の型録にも出て居り、變型ポーター天幕と云はれてゐるものと大體同様です。このやうなものを立教山岳部でナンダ・コートへ持つて行つたと聞きましたが、竹節氏の著はされた「ナンダ・コットの登攀記」には寫眞でその片鱗がちよつと出てゐる丈で、どんな構造なのか判然しません。要するに、かまぼこの型をしてゐることだけは確からしくあります。

こんな型の天幕を作つてみやうと

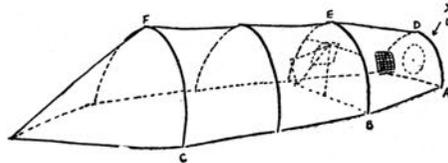
した動機は、冬期高所の幕營に使用する目的であることは勿論ですが、それよりも居住性といふことが第一に考へられたからです。即ちドウム型（アーケタイプツク天幕）に比してこのかまぼこ型の方が休息時にからだがぐつと樂である。僕達にはなによりも就眠時間中は、のびのびと身體を伸ばして樂々と眠りたい、つまり窮屈なおもひをせず充分な眠りを採りたいと云ふ考へがいつもつきまゝとつて居ります。そんなことからこの天幕に手をつけてみたのです。

初づこの天幕は大體が初めから定員を五人と定め、それを基準として設計しました。

天幕の構造は圖の如きものです。高さは四尺五寸としました。これで差支へはありませんでしたが、これは可能の範囲内でもつと高くすれば尚ほよろしいと思ひます。即ち理想としては六尺位に迄のばしたいと思ひます。幅は六尺です。これは横になつて足を眞直に伸ばし得る最大限度を採つたのです。

布地は最も上等品だと云ふ茶厚天といふのを使ひました。それをAからC迄に四布半を採りましたので、天幕全體の長さは約十尺三、四寸となりました。そしてBからCの裾にグラウンド・シートを縫ひつけまし

て、この部分を袋の如くしたので、A、Dの入口から這入つたA、B一福半の部分にはグラウンド・シートはなく、土足のままで出入は自由です。此所が土間であり、炊事場であり、外部から這入つて來た者の仕度を解く所です。ここからB、Eにある仕切りを掛けて居間に入る譯です。つまりこの仕切りを閉じればB、Eの間は完全な袋の状態となる譯です。



天幕の骨組

みは十六本とし、一個所を四本纏ぎとしました。この

フレームは幅一寸、厚き五分、中心に木を用ひ兩側に竹を張りつけたものです。これについてはいろいろ意見もありました。天幕屋が絶対に保證してゐましたし、實際にも心配したほどのことはありませんでした。然し、問題としては尚ほ残ることと思ひます。

このフレームは一端に取りつけてある金具に差し込んで纏ぐるので、在來のものと同じく變りません。唯作業中どうかすると雪の上へ放り出すので、この金具の中へ雪が詰ることあり、面倒がつてそのまゝ他のフ

レームを押し込むと、奥の方につまつた雪のために完全に接続せず、四本纏ぎのフレームが完全な弧を描かず歪んで、見た眼に不安定感を與へたことがありました。それにフレームとフレームとが完全に接続されてゐないために、尊い金具がそのうちに割れはしないかと云ふやうな心配もあり、こんなことは些細なことやうですが、登攀完了前には氣になるので、避けるに越したことはないと思ひます。フレームは天幕の内側に縫ひつけた帯に差し込んでから接続するやうにしました、そして張り綱はこのフレームを通した帯を引張るやうにしました。

グラウンドシートを附けた部分の内側にはキヤラコを張りました。勿論外部で融けた雪や、炊事の時の水蒸気などの爲めに天幕の内側が濡り、水滴の垂れるのを防ぐためでした。この布地にしても、かつらぎ、金布、シーティング、キヤラコ等どれがいいか分らなかつたが、これはむしろ目の粗い方がよいのではないかと思はれます。蚊帳のやうなものも考へてみました。

天幕の内側への張りつけ方は、奥の方から、あらかじめ天幕の内部にぶらさがつてゐる紐の所で、結び合つてゆくのです。これはピンと張らねばならぬので仲々厄介です。他にスナップなどで止める方法も考へられます。然し僕達は炊事は炊事場でやり、居間の方には餘り水氣を入れ

ませんでしたので、これ丈で完全に水滴は防げましたが、これでも永い間の生活にはどうでせうか。

ベンチレーターは附けず、炊事場、所謂「次の間」といふやうな土間の部分の兩側に、一尺に八寸の絲目の窓を附けました。これは夏の天幕につけるのとおなじやうなものです。これは出入の不便な天幕内から外部を眺められるためと、一つはベンチレーターに代る換氣を兼ねるためです。これは大變便利でした。つまり天幕内から少くとも三方面だけは居乍らにして眺められましたから。そして割合に不便なベンチレーターの必要は感じませんでした。唯この居間で煙草を喫はれると愛煙家でない者は困られます。最初の時四對一で四人が愛煙家でしたが、四人共心よく喫煙は次の炊事室でやりました。用事をしながら吸ふ或ひは煙草を吸ひ乍ら用事を足すといふ譯です。愛煙家の心理は解りませんがどんなものでせうか。

出入口は徑三尺の丸口をA、D點の中心に穿け、これに吹き流し式の長さ三尺の防水を施した薄手の天幕地の布を縫ひつけました。睡眠時はこの入口を絞り、次の仕切りの布を閉めると、内部は可成り保温力あり昨冬富士山吉田口七合五勺に張つた時も天幕内最底零下一度を下りませんでした。

張り綱は九本、別に説明は要しないと思ひますが、綱の端にナスカン

を附け有合せの岩石に張り綱を捲きつけて岩石を雪中に埋め、ナスカンを通して引き締める様にしました。

これで風に對してどうかと云ふと、甚だ漠然とした云ひ方ですが、やはり富士山の時、まる一晝夜可成りの風に叩かれヒヤツとした時が、三、四回ありました、それでも事なきを得ました、その時に考へたことは張り綱よりもむしろ天幕そのものに就いての構造でした。例へば風に向つた方に、風の抵抗を避けるために餘分に布を取り、圓(Cから左)のやうにした方がよいのではないかと思ひます。この新たに附け加へた部分をもグラウンド・シートを縫ひつけてここヘルツク・ザツク類を積んで置くやうにすれば天幕そのもの、押へともなり、風に對し一層の補強工作ともなるのではないかと考へられます。この風に向つた方を尖らせるといふ方法は前に述べた山岳講座にある型と同様です。

この天幕の架設作業は簡單で、この天幕を初めて扱ふ者丈で一時間を要しませんでした。馴れた者で四十分で充分です。馴れた者が袋になつてゐる天幕へもぐつて一番奥のフレームの組立てが終れば、あとはばた／＼と簡單に行きます。この天幕は最初想像してゐたものより仲々よく、改良次第によつては將來アークタイプ天幕に代る可能性があるのではないかと思ひます。

重量も多分二貫七・八百匁で三貫を越へなかつたと思ひます。

一九三三年の攻撃(二)

—エヴェレスト—
Camp Siteより

吉澤生

昨日の雪風の雪はスラブの上から大部分吹飛ばされて了つた。然し所々、傾斜してゐる棚の上にはまだ積つた残りがあつたのでそこを通る場合は慎重な態度で進んで行つた。

吾々はウインヤウエチャー等よりは一時間半も後にテントを出たのであるが寒さはまだまだ厳しく、やつとの事で東北山稜の方から昇つて来た太陽の光線にも殆ど温かさは感じられなかつた。

登攀者がエヴェレストへ来て最初に享け、そしていつまでも忘れ得ぬ印象は何處を見ても無愛想な荒涼たるその山貌であらう。黄帯の上には興味や幻想を興奮させるやうな岩も山稜もバツトレスもない、凡そ水平と名のつくものは何處にも見出せない、登攀者は綱が何の役をもしない傾斜した棚の上を何處までも辿らなければならぬのである。怎んなまでに荒れ果てた山を私は嘗つて眼にした事がないのだ。そして上方に、この長い退屈な道の上方に、この岩の屋根の一端に山頂のピラミッドが屹然と突立つてゐる、衰へ行く吾々の力には最後の恐るべき挑戦である。横切り乍らも少しづつ登つて最初ガリーを出た時から目標にして進んでゐた第一段階の其の根本に近づい

て来た。その形は不思議にも、私が嘗つてある霧の深い春の朝、食事前の運動の積りで登つた事のある湖水地方の山頂を憶ひ出させた。そこでは芝地の様に羊齒の生えた山腹を一時間で二三〇〇呎も登つたのであるが今は十一時間といふ日中の時間を持ち乍ら私は尙果して一、六〇〇呎を登つて降るだけの力と時間があるかどうかを疑つてゐるのだつた。

兎も角私は思つたより元氣ではある、身體を動かして来たお蔭で痙攣したり硬くなつたりしてゐた手足が柔くなり私の血管の中を温い血が活潑に流動してゐるのを意識したのは第六テントに着いてから以來初めての事であつた。然し不幸にもエリツクは全く違つてゐた。確實に歩いてはゐたが遅かつた。何處かに具合の悪い所があるといふ事は全く明瞭であつた。

第一段階から程遠からぬ地點まで吾々は小石で蔽はれた殆ど水平な臺地——キャンブサイトとしての可能性がある——を過ぎそれから殆ど横に辿つて行つた。吾々は今も第一段階の眞下に来てゐた、と其の時私は後で叫び聲のするのを聞いた。振返つて見るとエリツクは立停つてグツタリと彼の氷斧の上に凭れかゝつてゐる、次の瞬間彼は崩れるやうにその場へ坐り込んで了つたのである。西藏を横断してゐる時、吾々はパートナー二人の裡一人が登攀進行不能に陥入つた場合、採るべき態度に

就て幾度か討論を重ねたのであるが結局、一方が全く疲労し盡し單獨で安全に後退し得ぬ場合以外には同行者は一人で尙前進すべきである、といふ事に決つてゐた。遠征隊もそのリーダーも之には支持を與へてであらう。遠征隊の準則としては登攀者が完全に疲労し切るまで進む事は禁ぜられてゐた、エリツクは立派な登山家であつた、従つて之を敢えて犯さうとはしなかつたのである。人が登攀を續行し得ぬ時に立至つても尙比較的容易に且つ安全に下降の出来る或るポイントの存在するといふ事は高所登攀に於ける救ひの天恵であり、自然の自動的安全弁でもある。

私はエリツクに安全に天幕まで歸へれるかどうかを質した、彼は躊躇する所なく「大丈夫」と答へ尙然り後からついて来る旨を附け加へた。此の最後の言葉は其の時は私は感じなかつたが彼の大きな氣持ちから出てゐるものであつたのである。彼には其の時最早前進の考へは毛頭なく單に私を勵まし且つ私の彼に對する心配を取除く爲めのみ心から出た言葉であつたのだ。此れこそいつの日か人をしてエヴェレストの絶頂に立たしむべき一つの友情であるのであつた。岩の上に腰を下ろしてゐるエリツクを後にして私は登攀を續けて行つた。一分許り經つて後を振り返つて見たが彼はまだ動かうともしてゐなかつた。最良のルートに就ては迷ふ餘地がなかつた、第二段階の下へ

續いてゐる北東稜の上はひどく瘦せて居り而も鋸齒状をなして之は明らかに困難であつた、第二段階は今丁度自分の眞上に来てゐるが之は、んで寄り付け相にも見えな、宛で巡洋艦の鋭い軸の様である。旨く行ける望みのあるのはノルトンのルート即ち、急壁の下に横に引いてゐるグレイト・クルールルの頭に達する黄帯だけであるのだ。

初めの裡は難しい所もなく黄帯の上の傾斜した棚を次々と傳はつて行く、ある一角を曲るともうエリツクの姿は隠れて見えなくなつて了つた。暫くして十間許りの巾を持つ雪にぶつかつた。之を避けるにはどうしても百呎を下らなければならぬと思つたが幸ひにも豫期してゐた仕末の悪い粉状でなくて風の爲めよく緊つてゐる。全くステツブカツテイングを必要とする程の硬さであつた。足場刻みも二八、〇〇〇呎になれば實際骨の折れる仕事であつて氷斧は途方もなく重くなり一向思ふ様に持つて呉れない。アルプスでは小斧でさへも一度強く打込めば一つの足場は出来るのであるが二八、〇〇〇呎の高所にあつては激烈な動作は避けなければならぬので軽い短い打込を交互にやる様に行つた。其の時の私は宛で年老いた牝鶏が地中の虫を掘りかへしてゐる様に見えるたかも知れないがそれでも一つの足場を刻み終はると手を休め荒く息をつかなければならなかつた。(續)



エヴェレスト 遠征の省察

ヒュー・ラトレツヂ
島田生

三將 來

一九二一年と三五年の偵察を併せて六回遠征隊がエヴェレストを訪れた。毎回豊富な經驗をもたらしたが遂にどの隊も頂を踏み得なかつた。従つて最後の千餘呎の困難と危険については依然臆測しか出来ぬ状態である。一九二四年にノルトン、三三年にウイン・ハリス、ウエージャー、スマイスと全部で四人が二八、一〇呎まで達したが疲労と悪い雪の状態から退却を餘儀なくされた。一九三六年の遠征隊はこの先蹤者のいづれにも劣らぬものであり、しかも十五ヶ年の貴重な經驗を享けて向つたにも拘らず、第一回遠征隊が到達した處までも達することが出来なかつたのである。

こんな状態では一般大衆はもとよ

り、登山家は一層二つの疑問を抱くに到るだらう。即ちまづ第一に、一體頂上は必ず登れるのか、第二に方法は正しいのかと、この第一の問いに私が登れると答へたとき、識者は私を支持して呉れると思ふ。登れないといふ證據は一點だに存しないからだ。二八、一〇呎に到達した四人はいづれも再び繰返されることのないやうな状況によつて妨げられたのである。しかもこの上彼等四人は高所露骨や食料の點で充分な準備を持つて居なかつた。だから彼等はずっと素晴らしい活動能力を持つて居り、もつと充分な物資を給し、肝心の時まで徒らに疲労せしめずに置くならば、必ず登頂するに違ひない。

心理的要素も全く重要であるが、これも明確に好轉して居る。隊員もポーター達も、彼等がファースト・ステツプ直下の雪の斜面上、二七、八〇〇呎邊にキャンプを設置することが出来るといふ確信を抱いて居り、この事についての不安は既に永久に去つてしまつた。あらゆる種類の裝備も非常に改良され、露骨や食料の問題は實際的に解決を見て居る。登攀メンバーに初期の過重な仕事をさせまいとする作戦上の必要も理解され、山頂攻撃隊員の選抜、訓練等も理解されて來た。こゝでまだたつた一つ不確な要素は天候だけだ。どうしても幸運といふ要素が

はいつて來なければならぬ。この好運なくしてはエヴェレストは完登されないと私は考へて居る。好天候のときには私は登られると確信する。酸素が使用されるか否かは私にはわからない。賛否兩説が存するが私の意見では最高キャンプまで運び上げて置いて登攀者の任意にまかせた方がよいと思ふ。すべての裝備を整へ、好適な天候に恵まれ、最上のフォームにある際に山頂を目指すならば、頂上は疑ひないであらう。ところで次の疑問、吾々の方法は果して正しいかどうかだ、反對意見は主として活動の時期、隊員の數とその構成とに集中されて居る。時期の問題については既に述べた如く私は春と夏の間の時期が最適でありこれ以外にはあり得ぬと信じる。そして現地に到着が早すぎることは危険を孕む。人員の問題は充分、且冷静な考察を必要とする。個人的な好悪を捨て、この仕事に絶対必要のものだけを引離すのは非常な難事である。屢々耳にすることが、

「小遠征隊の方が非常に容易だし愉快である」といふことも、勿論それ自身はその通りで、私自身のヒマラヤにおける楽しい思ひ出は小人數のパーティーの時のことばかりではあるが、問題はそこにあるのではない。楽しみや手輕さだけが批判の標準ではないのだ。エヴェレスト遠征はアルプスでの休日の山登りとはちが違ふ。従つて吾々は自らの好みで

はなく、如何にすれば最大の能率を揚げられるかと云ふことで決めて行かねばならぬのである。

多くの登山家達、その中にはエヴェレストで雄名を馳せた人達も居るが彼等は心底から、大遠征隊が本質的に非能率的であると考へて居る。この考へを支持する主たる理由は次の如くである。

一、輸送が嵩ばり、緩慢になる。

二、數が多すぎる登山家間に高度の影響から生じた神経質による相互の摩擦が生ずる。三、仕事が重複し、進行の速度や移動性が鈍る。四、チベットの社會經濟組織に悪影響を與へる。五、好ましからぬジャーナリズムとの結合。

また時には更に別な反對理由が擧げられる。それはパーティー中に山嶺攻撃の能力を持たぬ人を包含することである。その人達の仕事が大遠征隊の場合にはどんなに必要不可欠のものであつても、小遠征隊の場合には省くことが出来るかと考へて居るのである。この小遠征隊主義者は強辯する。今迄に大遠征隊が一度でもヒマラヤでその目的を達したことがないではないかと。

私はまづこの最後の斷定を問題にして、これが我田引水の論であると云ひたい。大小いづれの遠征隊にしろ未だ曾て二五、六六〇呎以上の高峰には登頂して居ないのである。従つて小遠征隊が真正正銘の巨峰に

對して優秀な能力を持つて居るかどうかはまだ試験されては居ない。一九三六年のナンダ・デヴィ登頂の小遠征隊に對して私は賞讃の辭を送ることに於て人後におちるものではない。彼等は目的に對して驚くべき能率を發揮して成功した。しかしそれと同數の隊員が同じ方法を用ひてエヴェレストでも成功すると考へるのは危険だと私は推測する。エヴェレストでは本當に重大な困難が、ナンダ・デヴィの頂上よりも高いところから漸く始まるのである。またナンダ・デヴィではシエルバ・ポーターが隊員を失望させたため、隊員自らが運搬にも當つたのだが、私はエヴェレスト隊では英人メンバーは最高キャンプへ荷物を擔つてはならぬと考へて居る。もつとも擔ぐこと自身不可能なことかも知れないが。

次に大遠征隊のために輸送を行ふことの困難だが、これについては私自身が一番よく知つて居る筈だ。しかしこの困難は一九三六年の場合の如く克服され得た。進行が遅れるといふ批難に對しては、遠征隊がエヴェレストへ向つてた足早く向つた處で何の利益もあるわけではなく、且不足な高度訓練のまゝ到着することは決して有利ではないのだから輸送がブレーキになるといふ説は了解出来兼ねる。チベットの社會經濟生活に及ぼす影響についてはこゝでは述べる暇がない。お互ひの間の摩擦などは十二人の隊では取上

ける程のことではなく、特にお互互志がよく知り抜いて居る人達ばかりの中では問題にする必要はあるまい。勿論そこには互譲の精神がある筈で、エゴイストは一時も居られない。しかし英國人の大部分は團體精神を知りこのやうな際にそれを活用する道を知つて居るのである。

仕事の重複と云ふこともリーダーがその任務を心得て居れば起るものではなく、むしろ大遠征隊の場合でも、他人の領分にまで手を擴げる迄もなく各自手一杯の仕事を負はされて居る状態だ。

山頂攻撃の資格を持つ隊員だけが特別に遇されるべきだと云ふことはリーダーシップの問題とも關聯して居る。山頂攻撃の危険に直面し、困苦に耐へる當事者が、自分達自身で戦術を定め、救助手段を策したくなる氣持はわかる。特に彼等が既に登路の大部分を詳細に知つて居る今日では無理もない。この見解に對して私は完全な理解を持つたがた一つ警告したい事は高所では氣が短くなり、お互ひが批判的になりすぎる事である。従つて時々ノン・クライミング・リーダーは主役達よりも事態に處する冷静な考へを抱くことが出来、危くなつた平衡を取戻すのに役立つことがある。

アルプスの先蹤者達は特にリーダーの命に頼らず、必要な時には自然に誰かがリーダーになつたもので、特に正式のリーダーの必要を認めぬ

といふ意見も聞いた。しかしエヴェレストのやうな、環境に應じて即時權威を持つ命令を發する必要のある處ではこれは徒に混亂を招くのではないかと私には憂慮される。

また吾等の頂上攻撃隊員の中に一人の言語學者も含まれて居ないことも遺憾なことである。例へばポーター達との間にトラブルが発生した時にあのモリスがやり遂げた様にポーター達の言葉で話合つて解決したと云ふ様なことを忘れて居はしまいと思ふ。事が順調に行つて居る間は生嚼りでも役に立たうが、夫々の物事に精通した人達が傍に居ないと云ふことは非常な危険である。

醫師は二名を伴ふべきだと云ふことは前に述べたが、この場合二人の中一人はノース・コル以上へは登らないでも済むといふ明確な利益がある。

最後に無電の發受信が必要なのは必ず専門家を同行すべきで、氣象學の智識も備へさせる方がよい。

この仕事に携つた人はとても登攀の暇などはないだらう。ある人達は無電發信などは不必要だし、インドからの氣象通報を受信するだけで充分で、これは素人にも出来ることだと考へて居る。發信機の輸送が荷を重くすることは確かである。しかしそれは一面觀に過ぎぬもので、私の考へを以てすれば、發受信雙方で外界と接觸を保つことは、大事なことだと思ふ。チベットでは印度政廳の援

助を懇請しなければならぬやうな事が起り易いのである。

ジャーナリズムとの結合の問題も遠征隊の資金の問題と密接な關係があるのだ。大遠征隊は多額の費用を要する。しかも本國では富豪達はエヴェレストに登ることなどに金を出しては居られないと云ふのが真相である。しかし新聞はニュースを求め、特に初夏の霜枯時には特に變つたニュースが欲しい。しかも一般大

日本山岳畫協會 展覽會

自 七月六日
至 七月十日

於日本橋高島屋八階サロン

助を懇請しなければならぬやうな事が起り易いのである。彼等は云ふ。「隊員数を減じやう。直ちに費用は減じて個人の據金で賄ふことが出来る位になる。教養ある士が貴下と同様にセンチシヨナリズムに反對な事は貴下も御存知であらう。黙々として事に當れば、必ず充分な支持が集まるであらう。我等の他の主張は否認したければ、否認してよろしい。しかしこの一點を見逃すことは貴下の威嚴に關することだ」と。

全くそれは強い議論であり、急所を衝く一撃である。だが一つゆつくりその意味するところを考へさして貰はう。一例として隊員は六名ですべて有能な山頂攻撃者が望まれて居る。最優秀者六人を選出することは確かに我々には出来る。豫算は非常に少額で済むから、我々はジャーナリズムの問題などに頭を痛めなくてもそれ位の金額を集めることが出来るだらう。輸送組織も樂だ。恐く三十人のポーターで事足りるだらう。チベット通過の行進も早くなり、好天候を利用してノースコルに登路を開く直接の機會を捉へるであらうし、優秀この上ない六名の隊員は堅く信頼し合ひ、前回の經驗で高度馴致もよろしく、登頂の機會を窺ひ、シェルバとプーティヤ・ポーターから選擇した粒揃ひの助を藉りて、少くとも二回、恐くは三回の決死的な攻撃を敢行するに違ひない。この間

誰も遊んで居る者がなく、完全に勞力は節約され、しかも成功の機會は充分にあるといふわけだ。

私もこの計畫の場合のよさと萬事都合よく行つた場合の成功の可能性とを認めるに吝かではない。しかし私はウエリントン將軍が半島戰爭の際佛將軍の戦ひ振りを評した言葉を思ひ出す。

「彼等は美麗なる革馬具の如きもの、切れる迄は役に立たう。一方余の場合は切れても繩を以て繕ふは容易である。」

エヴェレストでは決して計畫通りに事が運ぶものではない。六人の隊にどんな事が起り得るだらうか。彼等が全部好調でベリスキャンプに到着したと假定しやう。——これは大遠征隊でも成就したことである。こゝで二名が病氣になるかも知れぬ。——これは一九三三年度に起つたことだ。残つた四名で兎に角前進し、氷河上にキャンプを設け、ノースコルに登路を見出さねばならない。若しも彼等が一九二四年や一九三三年の際のやうな天候に遭へばこの仕事が終わる迄にすつかり疲勞してしまふだらう。休息期間がどうしても欲しくなるが、その間に登攀に好適の天候が來たら、病人も再び加はつて他人々も出發用意を整へねばならなくなる。近寄つて來るモンソンを惧れながら隊は死力を盡して高所キャンプを設置し、最後の攻撃を決行するであらう。この間二名は體力が

弱るかも知れぬから、残った隊員達
は、悪天候の際やアクシデント突發
の場合にもノースコルから上方には
勿論、それ以外のどこにもサポート
して呉れる隊員が居ないことを知り
ながらも前進しなければならなくな
る。十中八九まで隊員中の誰一人と
してポーターに附添つて最高キャン
プから下降させてやれる餘裕のある
ものはない——従つてポーター達は
天候の善悪に拘らず自力で降りなけ
ればならない。若しキャンプが烈風
で破られたとか、足首を捻挫する以
上のことがあつても、救援するもの
がなく、個々の攻撃隊は勝ち抜た
めには自力に頼る外如何とも出来な
いのである。

こんなわけで、從來必要なりと考
へられて居たよりも小人数の遠征隊
の可能性を認めるとしても、私は適
當な豫備人員の必要を力説したい。
登攀隊員だけの場合は正しく合理的
であつても、私は八名以下では絶対
に賛成出来ない。それより少数で
は、私には不正な賭博としか思へな
い。遠征から歸つての報告に「五月
と六月の初めには天候は素晴らしか
つたが、そのときには山頂攻撃に使
へる調子のいい隊員が足らなかつ
た」と云はねばならぬ様なリーダー
の境遇を私は羨望しやうとは思はな
い。

別として今度の（一九三八年度）隊
はきつと最良のものとなるだらう
が、あまりに際どいことをして貰ひ
たくないと思ふ。若しも將來唯
一回しか遠征隊を送れないとすれ
ば、出来るだけ充實したものにする
べきである。（終り）

附記

本年度の遠征について

八名以下の登攀隊は賭博である
まで極言したラトレツヂ隊長の意見
にも拘らず、本年度エヴェレストへ
向つた遠征隊はティルマン隊長の
下にシプトン、スマイス、オデル、
リーヴァー、ウォーレン、ロイドの
合計七名であり、隊の構成に際して
も事々にラトレツヂの意見に反対す
る完全な小遠征隊であることは從來
のエヴェレスト隊に較べて革命的な
變り方だと考へられる。現在までの
報道で知られて居る點から推すと、
まづこの隊はノン・クライミング・
リーダーを持たぬ全員七名いづれも
山頂攻撃者であることが一番の問題
だ。隊員の顔觸れから推すと、いづ
れも輝しいヒマラヤ經歷を持つ羨望
すべき登山家ばかりであり、エヴェ
レストへ初見参はロイドだけだが、
彼は三六年度のナンダ・デヴィ登攀
の英米隊に参加して驚くべき體力を
發揮して二三、五〇〇呎の高所キャ
ンプまで荷を擔ぎ上げた男である。
この様に顔觸れは相當なものだが、
この七名で萬事に當り、別に専門の

醫師、輸送指揮官、無電技師、撮影
技師等を伴はぬ點も全くラトレツヂ
の提言とは相反する。醫師は隊員中
のウォーレンがその資格を持つので
萬一の場合に當るらしいが、ラトレ
ツヂが少くとも二名必要だと主張し
た醫師さへ専門のメンバーとしては
一人も加へて居ないわけである。輸
送指揮官、無電技師を省いた點も大
きな決断であらう。エヴェレスト委
員會がこの小遠征隊に賛意を表した
理由が何處にあるかは推測し難い
が、ティルマンやシプトン等の強固
な小遠征隊主義の主張が遂にラトレ
ツヂの大遠征隊論を打破つて實行の
域に達したのであらう。一九三五年
度のエヴェレスト偵察行や三六年度
のナンダデヴィで彼等が示した戦績は
たしかに小遠征隊の優秀さを物語る
ものであるが、一方ラトレツヂ隊長
の云ふ、ヒマラヤン・ジャイアンツ
に對しては大小いづれの遠征隊にし
る何事もなし遂げて居ず、眞の未知
数ではないかと云ふ意見、エヴェレ
ストの困難はナンダ・デヴィの山頂
以上の高所から始まると云ふ意見も
又確かに眞であるやうに思へる。

從來ハワード・バリー、ブルウス
將軍、ノルトン、そしてラトレツヂ
等の大御所に率ひられて堂々と馬を
進めた感のあるエヴェレスト遠征隊
に較べて、今年には齡で四十歳のテ
ィルマンが自らも頂上攻撃に参加す
る一員としてリーダーの役目を引受け
て居るだけに、突撃的な氣魄を感
じる。果してこの小遠征隊主義がそ
の能力を完全に發揮して登頂に成功
するかどうか、又はラトレツヂ老隊
長があくまで完璧を期する大遠征隊
主義がやはり正しいかどうか、傍觀
者にとつて今年のエヴェレストは一
段と興味深くなつたが、同時にこの
大小兩遠征隊主義の可否如何は將來
の我國遠征隊の組織にも資すべきこ
と多大だと思はれるだけに、この點
からも一段と注目すべきではあるま
いか。

春山報告

今年三月の東京商大山岳部の動き
を簡単に報告致します。當山岳部に
於ては、昭和十一年十二月以來積雪
期三シーズンに亘つて、山岳部全體
としての計畫、私共の所謂全體主義
的計畫をたて、主として雪上露營を
行つて行動してきた。がこの三月に
於ては分散的な計畫をたて、必ずし
も雪上露營等を不可分のものとせず
に行動したのであつた。乍然は一
概に全體主義的計畫乃至雪上露營等
の廢棄を意味するものではなく、次
の如き理由に基いて居るのである。

即ち、第一には、本學に於ては三
月の休暇は豫科と本科とその休暇の
はじまる日に十日位のへだまりがあ
り、従つて全體主義的計畫を遂行す
る爲には、早く休暇の始まる豫科部
員は十日近く待つてゐるか、若しく
は他の山へ一時行つてゐるかせねば
ならず、地方から出てきてゐる部員
の比較的多い現状では、三月の如き
休暇には出来れば成可く早く歸省し
たい者が多いのである。是は未だ
「山」に對して、又山岳部に對して本
科部員とくられば比較的愛着の度
の薄い豫科一、二年生には致し方な
いことであつて、かゝる爲に不参加
を申し出る者も一、二に止まらない
有様である。而も全體で二十名位の
部員しか持たぬ當部としては、半数
に近い部員不参加の出来ること
は、全體主義的計畫を遂行するに一
應躊躇しなければならぬ譯であ
る。

第二の理由としては始終全體主義
的な計畫を實行してゐると、豫科一
二年の部員は主としてサポートイン
グパーティとして行動する爲、雪山
及スキーの基本的技術がどうしても
充分に習得し悪くなることである。
過去の經驗からすれば、輪螺等の着
用はそれ程長時間の練習を必要とせ
ず自然になれてくるけれども、スキ
ー技術は矢張り正規の習練期間を経
なければならぬ様に思はれる。更
に又餘り始めから雪上露營の如きこ
とを經驗せしめるのも、如何かと思
つてゐる。即ちはじめに雪山へ這入
る者はスキーの基本技術、アイゼン、
テヒニツク等其他中々習練すべきこ
とが多く、一どきに雪上露營の如
き、未熟な者には相當不安を抱かせ
ることを習得せしめんとするのは、
かへつて結果として面白くない様に

思ふ。矢張り最初は従前の如く小屋を利用して、みつちり各方面の基本技術を錬磨した方が後日の爲に宜しいと考へる。

かくして私共は全體主義的な且雪上露骨を加味した計畫と、従来の如き分散的な計畫とを適當に配合し、その時々部の條件に順應してゆく可きであると云ふ結論に達した。而も分散的な計畫を實行してゐる時に於ても、他日ヨリ以上の大きな計畫を實行すべきあらゆる準備をおこたつてはならないのである。尙此の場合直接に關係はないが、夏季に於ては一昨年より實行してゐる全體主義的な合宿を行ふこと従来と變りなく、時によつては秋季等に幾分小規模な方法で同様なことを行つてもいゝと思ふ。

以上の結果此の三月は大體豫科部員のみまとまつて合宿をなし、その他は夫々四隊に分れて行動した。(1)八ヶ岳合宿(三月六日—十三日) 一行(望月 大塚 里見 木島 高橋 宮城 山田) 赤岳鐵泉を根據とす。八日に全員にて阿彌陀岳登頂(中岳阿彌陀のヨルより)九日は二隊に分れ一隊は赤岳直下の岩稜を登る。赤岳絶頂より北西に走る顯著なる岩稜の一つ北にある稜を登つた。是は赤岳直下の中で最も困難なるものと思はれる。赤岳直下の岩場は中岳寄り比較的サウンドであり、横岳に近づくにつれてもろくなる。今一つの隊は峰の松

目の尾根より硫黄岳横岳に登る。十二日も矢張り二隊に分ち一隊は横岳の西壁を登つた。ルートはほど横岳主峰と二十三夜との中間であり大體澤通し登り、登りきれない處は尾根にさけて通つた。かなり上部に十米餘の水壁あり。今一つの隊は中・アマダのヨルより赤岳に至る。 今年には雪が少なかつたが、十日に降雪あり、スキも北澤、南澤の奥にて相當にたのしむことが出来た。豫科部員の合宿としては比較的良好にいつたやうに思ふ。

(2)奥又白谷より前穂高東壁 (三月十日—二十日) 一行(森川 船本 佐々木 小谷 部) 佐々木は調子悪く先に下山。十六日森川、船本の兩名奥又白池に至りて雪洞を作りて泊る。十七日午前三時發、前穂高東壁のほど中央部を登攀し、最困難部を突破せるも意外に時間を要した爲、前穂頂上約七十米下より明神寄りにトラヴァースし主稜に出る。時に午後十時、月明を利して翌十八日午前二時雪洞へ戻る。極度に困難なる登攀であつた。十八日は休養、後發せし小谷部此の日雪洞へ来る。十九日、森川、船本の凍傷烈しく小谷部附添ひ德澤に下る。二十日、兩名下山、小谷部潤澤より奥穂高直下のルンゼを経て奥穂高登頂。二十一日下山。

(3)鳥海山(三月十二日—二十四日) 一行(岩崎 原) 十四日快晴に恵まれて新山の頂上に立つ。天幕持参すれども使用せず。(吹浦口、大平小屋を根據とす。) (4)五龍岳(三月十四日—十七日) 一行(木島 高橋 山田) 快晴に恵まれ八方尾根を経て、十六日容易に登頂す。 (5)爺岳(四月七日—十一日) 一行(大塚 山田) 最初の豫定では鹿島槍東尾根を登る心算であつたが、時日と天候の都合で變更し、大冷澤西俣小屋を根據として、爺岳東稜(獨標一九七一米のある尾根)を経て登頂。此の尾根は下半部はラツセルのみの苦勞であるが、上部はかなり急峻でありアンザイレンをなす。露路は長ザクを下つた。 以上御報告まで。(四・二〇記) 東京商大 一橋山岳部

會員通信

雨飾 行

三月十九日(快晴) 中土驛着午前十一時過。驛前にて中食。山田旅館より迎へに來てくれた案内といつしよに小谷温泉へ出かけた。

三月二十日(快晴)

朝七時四十分出發。雨飾頂上十一時四十分—十二時三十分(中食)。三時半歸着(途中三十分程宛二回休憩。 雨飾はしばらく私の腦裏に在つ

た。白馬の方へ行つたが、この山は眺められた。又その名前も美しい。ちようど二日續きの休日があつたので土曜日を足して、この山と笹峰へ越すことをあてにして出かけて行つた。温泉で世話をしてくれた案内といつしよに行く。御天氣は馬鹿げて良く暑い、雪も軟く最後の頂上の登りも私はアイゼンをはいたが、無くても済んだ、頂上ではもつて来たハンバグステイキを食べる。快晴、すつかり見える。早く降りすぎるので歸途は澤の處でちようど腰掛けにいゝ木の股があつたので林檎やお菓子をたべ遊んで行つた。それから温泉の裏の「練習場」の上まで來たら昨日の案内が木を切つてゐたので、またスキイを脱いで煙草をのんで行く。歸つて温泉に入る。それでもまだ日が高く輝いてゐるので、日向でD.H.ロレンスの傳記を読む。此頃になつてまた何となく心を引かれることがあつて、この人の書簡集なんか讀み出した。一九一九年二月の Katherine Mansfield(宛てた手紙の中心) "It is snow here—white, white, white" といふ句が折にふれ口に出たりする。

三月二十一日(晴)

七時五十分出發、乙女峠十時五十分、途中中食、笹峰一時四十五分—二時十五分、杉野澤四時十五分—三十分、田口驛六時、八時少し前の汽車で歸る。 乙女峠で、そこまで送つて來て貰

會務報告

四月小集會

四月九日 日本橋商工俱樂部 日本登山史の展望 大峯山塊を中心として 講演者 會員 笹谷良造氏 來會者 茨木猪之吉、望月達夫、吉田禮二 橋本晋七郎、木村鐵吉、島田 巖崎京二郎、吉田竹志、辻 莊一 荒井道太郎、早川義夫、三崎榮一 飯塚篤之助、野口末延、酒井忠一 笠原潤二郎、其他

五月定例理事會

五月五日午後六時半 於虎門事務所 出席者 小島、木暮、冠、鳥山、木村、早川、吉澤、野口、角田、宮崎、加藤、中司 一、山日記の件 一、山岳第三十三年一號の件 一、副會長並評議員選任の件

- 一、事務員の件
- 二、事務分擔の件
- 三、會計の件
- 一、山岳原稿料の件
- 二、次回小集會の件
- 三、有志晩餐會の件
- 一、厚生協會の件
- 二、新入會員詮衡の件

會員計報

昭和十三年四月十一日逝去
一五〇六 東京市 鍋島直定氏
本會は茲に謹みて哀悼の意を表す。

代表者變更

東京市日本橋區本石町 池田五郎
日本銀行山岳會代表
大阪市北區中島大阪朝日新聞社 大山千代雄
朝日文庫代表
芝區愛宕町

慈惠會醫大山岳部 篠原進

昭和十三年五月十五日印刷
昭和十三年五月十六日發行

發行兼編輯者 吉澤一郎

東京市芝區琴平町一(二)屋ビレ
發行所 日本山岳會

電話芝(四五)一六四九
振替東京四八二九

東京市芝區松町一丁目十三番地

印刷者 植田庄助
印刷所 成文堂印刷所

山 日 記

編會岳山本日

庫文波岩

-1938-



昭和十三年の登山季節を控へ、待望の『山日記』一九三八年版は既に編輯を了し、六月中旬を以て愈々發賣の豫定である。初刊以來茲に九星霜、昨年版の刊行に當つては内容並に體裁に涉り全般的に劃期的更新を行ひ、使用者の利便に應じて好評を博したが、本年版は更にその效用を擴充すべく、苦心蒐集せる新資料によつて、特に登山日程表、山小屋、山案内、全國登山團體一覽、本邦山岳語彙、郵便規定の各項に追加改訂を施し、その正確を期すると共に本邦唯一の『山日記』たる眞價の發揚に努めてゐる。本日記が登山家必携の寶典たるは云ふまでもなく、國民體位向上の特に強調せられる時、願くばシーズンの活躍を計畫してこの新版の出來を待たれよ。

¥ 1.20

菊半截判四〇頁
挿入地圖十三
レザークロロス裝

大島亮吉著
山一研究と隨想
菊判五〇〇頁クロロス裝
定價三・〇〇 送料三三

小志賀重昂著
小島島水解説

日本風景論
價四〇 送〇六

ジョン・ラバック著
板倉勝忠譯
自然美と其驚異
價四〇 送〇六

矢島祐利譯
アルプスの氷河
第一部主に科學的
價各四〇 送各〇六

ウイム・パー著
浦松佐美太郎譯
アルプス登攀記
上・下
價各四〇 送各〇六

店書波岩

東 京 神 田 橋
東 替 東 二 一 六 四
振 京 東 二 一 六 四